

大阪大工 家本 修

1. 目的：日本における高齢者婦人の被服選択行動は、一般にステレオタイプ化されているように自他共に認識されているようであるが、この行動は事実存在するのか。高齢者婦人の被服に対する嗜好行動と被服選択行動間に特定関係が存在するのか。これらの課題を解明するための資料や論理体系が十分に整備されているとは言い難い。そこで上記課題の解明を主目的とし、本報ではそれらの傾向を把握することを目的とし、今後の調査研究のための課題条件の検討と調査方法の確立を併せて検討するため、以下の調査を実施した。
2. 方法：調査法：配票留置法、調査期間：昭和59年5～9月（主調査期間5～6月）、有効回収数：140（回数率：93.7%、有効回収率：87.5%、内女性105名を分析対象とする。）、調査対象高齢者条件：単独外出行動が可能で外出意思のあること、主として中流生活意識を持つこととした。調査地域：大阪東部地域を中心に京阪神・時間距離1.5時間以内、調査員：家政科短大生、対象選択：都合上各調査員の身近に居る条件適合高齢者。
3. 結果：①被服購入金額に五千円と一万円にピークがある。金額が高い程年齢層が若い傾向を示す($r = -.604, P < 0.05$)②購入時の良く相談する相手は、金額が低い程嫁であり高い程実の娘が多い($F\text{-TEST}, P < 0.05$)③通常時の和服着用傾向は、年齢層による差は見られないが、外出着用時で明治生まれの層が大正生まれより多く着用する傾向がある④嗜好イメージ色は、和洋とも茶、黒、灰色が好まれるが、年齢層が若い程青、緑色加わり選択幅が増える($F\text{-TEST}, P < 0.05$)⑤柄は、小柄模様が好まれ、大柄模様は好まれない($P < 0.05$)
4. 謝辞：本報の調査は、大阪信愛女学院短大・高橋俊子先生の御尽力を得ました。